バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 149 号　〔2017 年 7 月〕

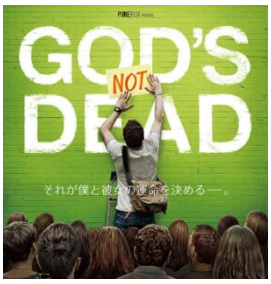
さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第号をお送りします。今月は DVD 映画鑑賞会をしました。鑑賞した映画は**『神は死んだのか（原題：GOD'S《NOT》DEAD）』**。とても考えさせられました。



大学に入学したジョシュは、ラディソン教授が教鞭をとる哲学の授業を受講することにするが、無神論者のラディソンは初日の授業で「GOD IS DEAD（神は死んだ）」という、神の存在を否定する宣言書を提出するよう生徒全員に強要。単位を落としたくない生徒たちは言われた通りに提出するが、ジョシュはそれを拒否する。そんなジョシュに、ラディソンは「では、神の存在を全生徒の前で証明してみせろ」と迫り、ジョシュは信仰心と自分の将来のどちらをとるかで思い悩み牧師を訪ねた。牧師はただ、ふたつの聖句を彼に渡した。

だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないというものは、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う。（マタイ 10:21-33）

「すべて多く与えられたものは、多く求められ、多く任された者は、さらに多く要求される。」（ルカ福音書 12:48）

負ければ留年、勝っても教授に憎まれて単位をもらえないかもしれないが、ジョシュは意を決して教授の挑戦を受けて立つことにする。ディベートは最初、どう見ても学生のほうが劣勢であるものの、彼は与えられた最後のチャンスである 3 回目の発表で教授にとどめの一言を発する。この言葉に教授は、自分の混在意識の中で、神がずっと生き続けていたことを悟る。

アメリカの大学で実際に起こった訴訟事件を題材に作られたこの映画の中では他に、別の神を信じるイスラム教の家庭や、無神論教育を受けたジョシュの中国人クラスメート、仕事が神になっているジャーナリストのエミリー、意外にもクリスチャンであるラディソン夫人、北米では有名なリアリティーショーの Willie Robertson、そしてクリスチャンバンドの Newsboys の本人たちまで登場し、彼らの様々な人生の展開の中でとても考えさせられる言葉の数々を聴かせてくれます。

日本人は神の存在に関して無関心な国民。神道という日本独自の神をまつる宗教はあるものの神道の言う「神」は実のところ「ご先祖様」。つまり結局は自分の家族であり、力ある神のような存在ではありませんし、仏教はもともと哲学であって、神の存在はありません。こうした性格の宗教を持つ風土で育まれ、「今が楽しく充実していればいいじゃないか。死んだあとのことなど考える意味はない」という意見が多勢を占める日本人にとって、この映画はとっつきにくいか、「意に反する」分野に分類されるストーリーになることでしょう。しかし、宗教に無関心で心満たされる人生が送れるのでしょうか。もし私たち信仰を持つ者がジョシュと同じ立場に立たされたら、神が実在するということを日本でどうやって立証していくでしょうか。

この映画は、ジョシュの最後の一言によって神の存在に気付いたラディソン教授が事故に遭うシーンで幕を閉じていきますが、はたしてこれはハッピーエンドなのか？この問も観る人によって意見は様々に分かれます。何度も繰り返し鑑賞したい映画でした。

集会メンバーでご希望の方には DVD を貸し出しますのでご遠慮なく主催者までお知らせください。